

保育現場で求められているリズム遊びの指導法に関する一考察

—N区保育者対象「保育技術研修」を通して—

A Study about the Instruction Method of Rhythmic Ideas through Music in a Nursery School

伊藤 仁美
ITO, Satomi

キーワード：リズム遊び、音楽表現、保育者の音楽能力、保育技術研修

1. はじめに

本稿はN区子ども教育部保育園・幼稚園分野と本学が連携をとりながら、継続的に実施している音楽表現に関する保育技術研修についての実践報告である。平成26年度（2014年度）はN区内の保育園に勤務している保育者を対象に「乳児へリズム遊びの指導法」「幼児へリズム遊びの指導法」の、計2回の研修が実施された。保育

現場ではどのように乳児・幼児のリズム遊びが展開されているのか、また保育者はリズム遊びの指導法に対してどのような難しさを感じているのか。これらのことを本研修の実施を通して明らかにしていき、乳児・幼児に向けたリズム遊びの現況と課題について検討することを、研究目的とする。

2. 研究方法

(1) 研修の日程

研修は以下の要項で行われた。

研修名	日時	受講者数
A. わくわく楽しいリズム遊び (乳児編)	平成26年(2014年)9月5日(金) 14時～17時 場所:本学音楽演習室	35名
B. わくわく楽しいリズム遊び (幼児編)	平成26年(2014年)9月12日(金) 14時～17時 場所:本学音楽演習室	32名

(2) 事前調査（受講者より寄せられた本研修に関する

アンケート調査)

本研修に参加するN区立保育園およびN区内指定管理者園や私立保育園職員に対して、本研修でどのようなこ

とを学びたいのか、事前に自由記述式アンケート調査を実施した。その結果が表1、表2の通りである。

表1. 「この研修を受講するにあたり講師に聞いてみたいことを自由にお書きください」(A. 乳児編)

年齢別指導法に関する内容	<ul style="list-style-type: none"> ・1歳児クラスの月例の低い乳児に導入しやすい、簡易楽器を用いたリズム遊びを知りたい。 ・0歳児クラスの筋力の弱い乳児に相応しいリズム遊びを学びたい。 ・歩き始めた1、2歳児と一緒に楽しめる表現遊びを教えていただきたい。 ・これまでの研修で『だるまさんが』や『できるかな』といった絵本を用いた表現遊びを教えていただき、子どもたちと楽しく実践している。今回も1歳児向けの新たな絵本を使った表現遊びを教えていただきたい。 ・乳児(0、1、2歳児)クラスで体幹を鍛えバランス力をアップするリズム遊びを知りたい。 ・4、5歳児と乳児が楽しく関われる活動を知りたい。 ・2歳児の発達に適したリズム遊びを学びたい。 ・2歳児クラスで歩行に不安定さのある子ども(転び易い)の身体づくりに有効的なリズム遊びについて学びたい。
年齢に関係なくリズム遊びの指導法全般に関する内容	<ul style="list-style-type: none"> ・リズム遊びを始める時の導入の仕方はどのようなものか。 ・各年齢で大事にしていきたいことや、幼児期に繋げていくために押さえていく必要のあることをお聞きしたい。 ・親子で楽しめるリズム遊びを教えていただきたい。 ・狭い部屋でも安全に、全身を沢山動かせるリズム遊びを知りたい。 ・途中で興奮してしまい、走り回る等遊び始めてしまった時の惹きつけ方について。 ・運動会等の場面において親子と一緒に楽しめるリズムダンスのレパトリーを増やしたい。 ・リズムの一つひとつの動きに対する注意点や子どもに伝える時のコツを聞きたい。 ・子どもたちと表現遊びを楽しんで行う工夫の仕方を知りたい。 ・ピアノではなく、身近な楽器を使ったリズム遊びを学びたい。 ・乳児期に心地よい音、リズムとはどのようなものか。 ・子どもの身体が自然に動いてしまうような音楽、リズム、歌を新しく知りたい。 ・乳児の表現遊びで気をつけることは何か。

(3) 研修の内容

研修の実施内容の詳細については以下の通りである。

A. 「わくわく楽しいリズム遊び」(乳児編)

①演習：リズムの基本である「拍」(ビート)まわし

- ・拍(ビート)を1拍ずつ叩いて全員で拍回しをしていく。
- ・「手拍子」と「休止」を交えたリズムパターンをつくる。
- ・『世界中の子どもたちが』の曲に合わせて1人4拍ずつ手拍子して隣の人に回していく。

②演習：言葉がけを伴ったリズム遊び

- ・ペアになり、一人が保育者役、一人が子ども役となる。保育者役が子ども役の名前を呼びながら、ボールを渡す。呼ばれた子ども役は「はい」と返事をしながら、ボールを保育者役に渡し返す。
- ・同じ活動を速さや強弱を変えて行う。
- ・絵本『ごあいさつあそび』(偕成社)を読み、物語の「とんとんとん。こんにちは」のフレーズに合わせてペアで「ノック」「お辞儀(ごあいさつ)」の動きをつけて行う。

③演習：歌を伴ったリズム遊び1

- ・『メリーさんのひつじ』を歌いながら、4分音符を叩く。
- ・『メリーさんのひつじ』を歌いながら、2分音符を叩く。
- ・『メリーさんのひつじ』を歌いながら、8分音符を叩く。

④演習：歌を伴ったリズム遊び2

- ・『きらきら星』に様々な動きを取り入れて歌う。(手を叩く、手をひらひらさせる、手をクロスさせて胸に置く)

⑤講義：リズムとは

- ・リズムとは音楽だけではなく、生活のリズム、宇宙のリズム、自然のリズム等、様々な事象にリズムが息づいている。
- ・リズムの基本は「拍」(ビート)である。拍のまとまりが「拍子」となり、乳児や幼児にリズム遊びを導入する場合は、始めに、「拍」感覚の獲得が必須である。
- ・身体の動きを伴いながらリズムを感じることで、リズムに対する「イメージ」を持ちやすくなり、リズムバランスも整い、リズムに乗ることの心地よさを体験出来る。
- ・身体表現を伴うリズム遊びは、空間認識と身体認識

表2. 「この研修を受講するにあたり講師に聞いてみたいことを自由にお書きください」(B. 幼児編)

年齢別指導法に関する内容	・3歳児クラスで楽しめるリズム遊びを教えてください。 ・3歳に適したリズム遊びや楽器遊びを教えてください。
年齢に関係なくリズム遊びの指導法全般に関する内容	・子どもがイメージを広げ自然と身体を動かしてみたくなるような曲や言葉がけ、あそびの発展のさせ方などを学びたい。 ・子どもがなりきって遊びたくなるようなきっかけ作りを知りたい。 ・リズム遊びを通して、体力の向上や発達を促し、他の遊びに繋がっていく動きを知りたい。 ・それぞれの動きによって、子どもたちにどのようなリズムの気持ちよさを感じさせていくか等、解説を聞きたい。 ・興味が持てない子や、ふざけて走り回ってしまう子が楽しく参加できるような工夫とヒントを教えてください。 ・ピアノを使わなくてもできるリズム遊びを知りたい。 ・リズム遊びをする上で、子どもと楽しく行える話術や技術を学びたい。 ・実際に自分が動いてみることで、リズム遊びのどういう部分が楽しいと感じるかを体験し、保育に取り入れたい。 ・苦手意識を持つ子に対しての声かけや誘い方のコツを教えてください。 ・布、紐、スカーフ等を使用するリズム遊び、表現遊びを学びたい。 ・ゲーム性のあるリズム遊びを知りたい。 ・リズム遊びをする際、苦手意識があるのか、活動に参加せず見ているだけの子どもがいる。無理には参加させたくはないが、リズムが楽しいと思う内容を学びたい。 ・ピアノ以外の楽器を使ったリズム遊びを知りたい。 ・リズム遊びが始まると楽しくなり、興奮して友達との距離感が取れなくなってしまう場合、どうしたらよいか。 ・表現することや、身体を動かすことが苦手な子どもが、自然と身体を動かし、楽しいと思えるようなリズム遊びの方法を知りたい。

を深めることが出来る。

- ・想像性、創造性、表現力、個のリズム、集団のリズムの共有等の感覚を伸ばすことが、リズム遊びの主なねらいである。

⑥演習：絵本を使用したリズム遊び

- ・絵本『びたっ』(福音館)を読み、物語に登場する「びたっ」の言葉のリズムと同じ動きを表現する。
- ・絵本『がちゃがちゃどんどん』(福音館)を読み、物語に登場する特徴的なオノマトベに合うような動きを、グループで考え発表する。

⑦質疑応答

- ・事前に寄せられた質問に対して解説を加える。
- ・研修を終えて感想を記述する。

B. わくわく楽しいリズム遊び (幼児編)

①演習：リズムの基本である「拍」(ビート) まわし

- ・拍(ビート)を1拍ずつ叩いて全員で拍回しをしていく。
- ・「手拍子」と「休止」を交えたリズムパターンをつくる。

- ・『世界中の子どもたちが』の曲に合わせて1人4拍ずつ手拍子して隣の人に回していく。

②演習：歌を伴ったリズム遊び1

- ・『大きなたいこ』の曲を歌いながら「大きなたいこドーンドーン」の部分をタンバリンで、「小さなたいこトントントン」の部分をカスタネットでリズムを叩く。

③演習：歌を伴ったリズム遊び2

- ・『あしぶみたんたん』の曲を歌いながら、歌詞にあわせて「あしぶみ」「手を叩く」「ピョンと飛ぶ」などのリズムカルな動きを交える。

- ・『おんまはみんな』の曲を歌いながら、「ギャロップ」「手を叩く」「首を振る」などのリズムカルな動きを交える。

- ・『おもちゃのチャチャチャ』の曲に合わせて、「おもちゃ」の部分は足で「ストンプ(足踏み)」、「チャチャチャ」の部分は「手拍子」でボディパーカッションをしながら歌う。

④講義：リズムとは

- ・リズムとは音楽だけではなく、生活のリズム、宇宙

表3. 報告課題：「研修の感想及び今後仕事に活用できることを書いてください」(A. 乳児編)

- ・リズムに乗り心地よく身体を動かす楽しさを実感できた。
- ・乳児にとっての保育者の声の高さ(トーン)、速さ(テンポ)の重要性を初めて知った。今後の保育において実践したい。
- ・「リズム」についての講義は有意義であった。私たちは講義内容にあったように様々なリズムに取り囲まれていて生活しているのであれば、リズム遊びを通して「良いリズム」が身につくような保育を実践してまいりたい。
- ・絵本『びたっ』『がちゃがちゃどんどん』の表現活動を子どもたちと是非楽しみたい。
- ・ピアノを弾くことに苦手意識があり、ついリズム遊びやリトミックを敬遠しがちだったが、研修を受けてみて意識が少し変わった。タンバリンやカスタネットを使って動いたり、言葉のフレーズからリズムを感じて遊びに発展していくことを学んだ。
- ・オノマトペの入った絵本はリズムを感じやすく、乳児のリズム遊びへの導入に適していることを感じた。
- ・リズム遊びをやらなから興味がないのだ、と決めつけるのではなく一人ひとりの表し方には個人差があることを学んだ。見守ることの大切さ、そしていつの日か、表し方が緩やかな子どもの“表出”の場面に立ち会えたときは、大いに共感したい。
- ・普段の保育において、リズム遊びを立案するとき、考え過ぎてしまうことがわかった。もっと柔軟にリズム遊びを捉え、きっかけは絵本や言葉のリズムといった身近な事柄からリズムを感じる大切だと学んだ。
- ・明日から子どもたちとすぐにやってみよう、と思える親しみやすい内容であった。
- ・乳児での楽器遊びの導入については、まずは子どもたちの手のひらにすっぽり収まるサイズのもの(カスタネットやたまごマラカス等)が適していると聞いたので、積極的に取り入れたい。
- ・拍を感じ、空間認識やからだの認識をし、想像性に繋がっていく話を興味深く聞いた。
- ・『きらきら星』『メリーさんのひつじ』など親しみのある歌に合わせてリズム遊びをすることは、明日からの保育に活かせると思った。
- ・絵本を通したリズム遊びは、大変参考になった。
- ・普段の保育における「朝の時間」等、ゆったりとした時間に研修内容を子どもたちと楽しみたいと思った。
- ・保育者自身がリズム遊び=音楽、リズム遊び=ピアノを使った活動、といった苦手意識を持たずに、リズムを楽しむことが大切、と感じた。
- ・研修後、翌日の保育にて研修で習った『ごあいさつあそび』の絵本の活動を基にしたリズム遊びをした。はじめは不思議そうにしていた子どもたちも、次第に呼びかけに応じ、最後は笑顔で楽しんでいて、今後も活かしていきたい。
- ・手を叩けば、そこからリズム遊びが始まる、同じリズムを一緒に刻むことの心地よさが感じられる等実感できた。
- ・リズム遊びでは、子どもが何かを表現したい、と思う意欲を育てることの重要性を学んだ。

のリズム、自然のリズム等、様々なものにリズムが息づいている。

- ・リズムの基本は「拍」(ビート)である。拍のまとまりが「拍子」となり、乳児や幼児にリズム遊びを導入する場合は、始めに「拍」感覚の獲得が必須である。
- ・身体の動きを伴いながらリズムを感じることで、リズムに対する「イメージ」を持ちやすくなり、リズムバランスも整い、リズムに乗ることの心地よさを体験出来る。
- ・身体表現を伴うリズム遊びは、空間認識と身体認識を深めることが出来る。
- ・想像性、創造性、表現力、個のリズム、集団のリズ

ムの共有等の感覚を伸ばすことが、リズム遊びの主なねらいである。

⑤演習：絵本を使用したリズム遊び

- ・絵本『ものすごく大きなプリンの上で』(教育画劇)を読み、物語の中にある様々な場面(ホットケーキの上、アイスクリームの上等)でジャンプすることをイメージして、身体表現活動を行う。

⑥質疑応答

- ・事前に寄せられた質問に対して解説を加える。
- ・研修を終えて感想を記述する。

(4) 研修の成果

両研修終了後、N区立保育園勤務者からの全受講者、N

表4. 報告課題：「研修の感想及び今後仕事に活用できることを書いてください」(B. 幼児編)

- ・タンバリン等を使用したリズム遊びの展開方法を教えていただき、是非実践したい。
- ・リズム遊びやリトミック、という難しく考えがちだが、保育者が見本となって手拍子をしたり、ボディパーカッションを行う等、工夫することでリズム遊びが親しみのある活動になり得る、と学んだ。
- ・以前、伊藤講師によるリズム遊びの乳児編に参加したが、幼児編となるとリズムの種類が増え、集団で分かち合うことが出来る活動が多いと感じた。
- ・タンバリンやカスタネットを通したリズム遊びの指導法は、よりリズム遊びを柔軟に考えることが出来るのは、と感じた。
- ・リズム遊び=ピアノを使って行う、というイメージがどうしてもあったのだが、楽器がなくても、速さ、強弱、を変えてみたり、お友達と一緒に手を叩く、手を合わせる等の動きを入れることで、幅広く楽しむことがわかった。
- ・リズムには、「動」と「静」があることを学んだ。
- ・始めは恥ずかしさがあったが、リズムに合わせて動くとはやはり楽しく、自然と笑顔が出ていることに気づき、きっと子どもたちも同じなのでは、と感じた。
- ・『おもちゃのチャチャチャ』等馴染みのある曲に合わせてリズム遊びを展開することは、試してみたい。
- ・保育者の“しかけ”で、リズム遊びが楽しくなることを研修で学んだ。音楽の楽しさを子どもたちに伝えていきたい。
- ・昨年も伊藤講師の研修を受け、その時習った歌を年長児クラスの合奏で取り入れた。日常の保育にすぐ導入できる研修内容というのがこの研修の素晴らしさだと思う。
- ・音楽リズム、という言葉聞くだけで構えてしまう自分がいたが、もっとリズムを幅広く捉えよう、という意識が生まれた。
- ・研修開始時、少し緊張した雰囲気であったが「ビートを感じるリズム遊び」をしてくださり、すぐに和やかな雰囲気となった。「保護者会でよく行うリズム遊びです」と仰っていたが、納得した。リズムには人をリラックスさせる効果があることがわかった。
- ・リズムの楽しさ、難しさ、奥深さを考えさせられた。

区内指定管理者園や私立保育園からの受講者は任意で研修報告書を作成し提出することが、研修を主催するN区子ども教育部保育園・幼稚園分野より義務付けられている。この項では、①研修の感想、②研修で学んだことを保育現場にどう反映できるか、の2点について受講者がどのように報告したか、表3及び表4に示した。

3. 2-(2)に関する考察

受講者がどのようなことを学びたいと考え、本研修に参加したのか、また日常の保育においてリズム遊びを展開する際に感じている問題意識は何か。これらについて2-(2)の乳児編、幼児編の事前調査を通して明らかになったことを述べたい。

(1) 両編の共通事項

両編における共通事項は「ピアノを使わなくても展開できるリズム遊びについて知りたい」という要望が複数あったことである。このことは、リズム遊び=ピアノを

使った音楽活動、というイメージが多くの保育者の中に根付いており、この場合、ピアノを弾くことに苦手意識を持った保育者は、保育の中でリズム遊びを展開することに消極的になり、抵抗感があることが浮き彫りになったのではないだろうか。ゆえにピアノ以外の楽器を使ったリズム遊びの指導法について知りたい、という要望が多かったであろう。また、保育室における活動では、ピアノを用いることよりも乳幼児との直接的な触れ合いや関わりを持ったリズム遊びが多く展開されていること、あるいはピアノが設置されていない等の保育環境を反映している結果なのかも知れない。しかしながら「子どもたちと表現遊びを楽しんで行う工夫の仕方を知りたい」(乳児編)「リズム遊びをする上で、子どもと楽しく行える話術や技術を学びたい」(幼児編)とあるように、本来リズム遊びは子どもたちにとって心が躍る楽しい活動であり、このことが保育者自身のリズムに対する苦手意識やピアノ等の保育技術によって、活動そのものが憚られることは心許無い、という保育者側の心情が伺える。

(2) 乳児編を受講した保育者の傾向

次に乳児編における調査結果の特徴を3点述べたい。1点目は、年齢別指導法に関する質問が多く、このことは乳児期における発達、非常に細かい時期で様々な変化やスモールステップの成長が少しずつ生じる、と保育者が捉えている結果であろう。2点目は「乳児クラスで体幹を鍛えバランス力をアップするリズム遊びを知りたい」、「2歳児クラスで歩行に不安定さのある子ども(転び易い)の身体づくりに有効なリズム遊びについて学びたい」、「0歳児クラスの筋力の弱い乳児に相応しいリズム遊びを学びたい」といった要望があるように、乳児におけるリズム遊びは、音楽活動に限定したものでなく、身体運動の領域にも関連づけながら保育者が捉えている、ということである。3点目は、幼児編を受講した保育者の結果と比較してみると、乳児編ではリズムに対して苦手意識を持つ子どもの対処法についての質問が見受けられない、ということである。

(3) 幼児編を受講した保育者の傾向

幼児編の調査結果についても3点述べたい。1点目は前述の通り、年齢別指導法に関する内容が3歳児クラスでの展開方法に関する質問のみで、乳児編と比較すると極めて少ない、ということである。2点目は、「子どもがイメージを広げ自然と身体を動かしてみたくなるような曲や言葉がけ、あそびの発展のさせ方などを学びたい」、「子どもがなりきって遊びたくなるようなきっかけ作りを知りたい」、「それぞれの動きによって子どもたちにどのような気持ちよさを感じさせていくか等解説を聞きたい」とあるように、幼児の身体と心が躍り、活動に入りたい、と思うような「リズム遊び」へどのようにいざなっていくか、についての質問が複数見受けられたことである。3点目は「苦手意識を持つ子に対しての声かけや誘い方のコツを教えていただきたい」、「リズム遊びをする際、苦手意識があるのか、活動に参加せず見ているだけの子どもがいる。無理には参加させたくないが、リズムが楽しいと思う内容を学びたい」、「表現することや、身体を動かすことが苦手な子どもが、自然と身体を動かし、楽しいと思えるようなリズム遊びの方法を知りたい」とあるように、幼児編になると、リズムに対して苦手意識を持つ子どもに関する質問が乳児編に比べて増えたことである。リズム遊びの参加に消極的な子どもたちが、どうしたらリズムの面白さ、楽しさを味わうことが出来るようになるのか。保育者の苦悩を垣間見る調査結果といえよう。

4. 2-(4)に関する考察

研修終了後、受講した保育者はリズム遊びについて、どのような意識の変化が生じ、学びが深められたと考えたのだろうか。ここでは2-(4)の受講者による研修報告書の内容を通して考えてみたい。

「リズムに乗り心地よく身体を動かす楽しさを実感できた」(乳児編)、「始めは恥ずかしさがあったが、リズムに合わせて動くとはより楽しく、自然と笑顔が出ていることに気づき、きっと子どもたちも同じなのでは、と思った」(幼児編)等の受講生の気づきを読みとれた。このことは、保育者が自ら身体を動かし、様々なリズム遊びを受講者らが一丸となり体験することで、リズム遊びの楽しさ、心地よさを感じ、今度はこの楽しさを子どもたちに伝えたい、と思われたようである。これは、本研修の大きなねらいの一つとしたことと重なりあうことが確認できた。また、3-(1)で述べたように、研修前には、ピアノ等の保育技術への苦手意識を持つ保育者の姿が複数見られ、尚且つリズム遊び=ピアノを使った活動、という認識が強い為に、リズム遊びの展開方法に不安を持っていることが見受けられた。しかし研修を終えた後「ピアノを弾くことに苦手意識があり、ついリズム遊びやリトミックを敬遠しがちだったが、研修を受けてみて意識が少し変わった」(乳児編)、「保育者自身がリズム遊び=音楽、リズム遊び=ピアノを使った活動、といった苦手意識を持たずに、リズムを楽しむことが大切」(乳児編)、「タンバリンやカスタネットを通したリズム遊びの指導法は、よりリズム遊びを柔軟に考えることが出来る」(幼児編)、「リズム遊びやリトミック、というと難しく考えがちだが、保育者が見本となって手拍子をしたり、ボディパーカッション等を行う等、工夫することでリズム遊びが親しみのある活動になり得る」(幼児編)、といった感想が寄せられた。これは、研修前と研修後において、受講者の持つリズム遊びに対する認識に変化が生じた結果であろう。

今回、本研修ではどのようなことを学びたいのか、について事前調査した結果を踏まえ、研修内容では、2点のことを意識的に取り入れた。1点目は2-(3)-Aの⑤および2-(3)-Bの⑤に示した実践内容である。「リズムとは音楽だけでなく生活のリズム、宇宙のリズム、自然のリズム等、様々な事象にリズムが息づいている」といった内容の講義を通して、リズム遊びをピアノによる活動、と狭義的な側面のみで捉えるのではなく、もう少し広義的に解釈するということの必要性を研修では提示した。そのためには、保育者自身が何に「リズム」を感じることが出来るのか、身近にある様々な事象に息づく「リズム」を受けとめることのできるか、といった保育者

自身の豊かな感性が大事であることを、筆者は受講者に働きかけた。さらにリズム遊びは身体表現を伴うことで、よりリズムに対するイメージが持ちやすくなり、動きを取り入れたリズム遊びの活動はリズムに乗る心地よさを効果的に誘発することについても強調した。では実際、どのようなことをきっかけにリズム遊びを展開することができるのか。研修では2つの実践事例を紹介した。1つは、絵本を使ったリズム遊びである。2-(3)-Aの②、2-(3)-Aの⑥、2-(3)-Bの⑤では、絵本を導入したリズム遊びの指導法を紹介し、絵本に登場するオノマトペや繰り返し出てくる言葉のフレーズに、リズムの抑揚、面白さを感じて、リズム遊びへと展開していく手法を実際に体験してもらった。リズム遊びは、はじめに音楽ありき、という意識が強かった受講者も少なくはなかったと思うが、絵本を使ってリズム遊びへと繋いでいくことは「絵本を通したリズム遊びは大変参考になった」(乳児編)、「保育者の“しかけ”でリズム遊びが楽しくなることを研修で学んだ」(幼児編)、等の感想が寄せられたように、リズム遊びのきっかけは多面的であってよいのだ、という気づきが、受講者の中に芽生えていったのかも知れない。

もう1つは、親しみのある子どもの歌を使ったリズム遊びである。2-(3)-Aの③、2-(3)-Aの④、2-(3)-Bの②、2-(3)-Bの③では、『きらきら星』『大きなたいこ』『あしふみたんたん』『おんまはみんな』『おもちゃのチャチャチャ』といった、保育現場でよく歌われている曲に、乳児、幼児が出来る身体運動(手を叩く、足踏み、手をひらひらさせる、歩く、ギャロップする等)を交えたリズム遊びの展開方法を紹介した。「『きらきら星』『メリーさんのひつじ』など親しみのある歌に合わせてリズム遊びをすることは、明日からの保育に活かせると思った」(乳児編)、「『おもちゃのチャチャチャ』等馴染みのある曲に合わせてリズム遊びを展開することは試してみたい」(幼児編)、等の感想が寄せられた。つまり、保育者の多くは、歌うこと、リズム遊びをすること、楽器を鳴らすこと、といった音楽活動の一つひとつを、単一的に捉えがちであるように思われた。すなわち、複数の活動を複合的に組み合わせて展開し、リズム遊びを総合的に楽しむ、という発想を保育者側が持つという段階には、まだ至っていないように思われた。

5. おわりに

本研修の事前調査では、リズム遊びの指導方法が定型化していたり、ピアノ等の保育技術に自信が持てない為に、リズム遊びを保育現場で展開することに億劫さを感じていたり、リズムに対して苦手意識を持つ子どもにも

リズムの楽しさに触れさせたい、といった思いを持って、受講者が本研修に参加したことが明らかになった。研修後、定型化の傾向にあったリズム遊びの指導法に対するイメージは、研修前よりも少し柔軟になり、保育者自身が様々な事象にリズムの息吹を感じ、想像力を持ってリズム遊びの展開をしていくことの必要性を感じ始めたことが、研修報告結果から読み取ることができる。今後は、ピアノ等の保育技術に不安感を持っている保育者が、基礎的な保育技術の向上を目指すきっかけとなる、より具体的な研修内容の実施と、保育現場と養成校とが研修を通じて、さらに連携を強めていくことが課題とされるであろう。

引用文献

- 1) きむらゆういち (1988)『ごあいさつあそび』偕成社
- 2) あずみ虫 (2013)『びたっ』福音館
- 3) 元永定正 (1986)『がちゃがちゃどんどん』福音館
- 4) 二宮由紀子・文/中新井純子・絵 (2010)『ものすごく大きなプリンの上で』教育画劇